
酷刑の守人は歪に笑う

青葉亮助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

酷刑の守人は歪に笑う

【Nコード】

N4115L

【作者名】

青葉亮助

【あらすじ】

とある廃れた小さな国で、守人と呼ばれる処刑人の男と、その守人を殺す少女が出会ったとき、ひとつの物語が幕を開ける。

■「第一章」羊を狩る者1（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語は創造上のものであり、実在する人物、団体、地名、出来事などとは一切関係がありません。
何卒ご了承ください。

■「第一章」羊を狩る者1

他人に、自分の心を晒す一番の行為はなんだろう？

私が思うに、それは笑顔。幾つもの吐き出した言葉よりも、人のそれは多くを語ってしまう。

それもそうだ。

笑顔とは、この広い世界で選ばれた人類だけに与えられたものであり、奇跡といえる行為。自然と、心の芯を映してしまう。

それゆえに、私は笑うことを辞めた。

私の笑顔は、歪いびつに歪ゆがんでしまっているから。

「ナンバーヨン No.44、貴方のメインイベントです。出なさい。余り客を待たせるものじゃない」

それは毎夜。

いつものごとく。

薄汚い小部屋には、その広さと釣り合わないほどの人影があつた。彼らは、皆一様にして不気味な木彫りの面を被り、それに加え、体は防寒用と思えるほどの分厚いマントで身を覆う。

この妙な外見からでは、彼らの性別すら判断に難しい。

面の集団は、それぞれがそれぞれの椅子に腰を預け、先の声に反応するでもなく、ひたすらに黙っていた。

誰も彼も、面の中から微かに覗く目の光は虚ろで、生気を宿している者はいない。

私も含め、ここにいるやつらはつくづく気持ちの悪い連中だ。素直な感想として、No.44ことシジ・リウエル・ホークリーはそ

う思った。

「ああ、すまない」

シジは、抑揚のない声で相づちを打ち席を立つ。

もうこの部屋には用はない。

途中、空をさ迷ういくつもの視線の先を通り抜けたが、どの視線もシジを追うことはなかった。

やはりまるで無関心。彼らは興味のひとつも示そうとはしない。世の中は酷く腐っている。

シジはいつもこの瞬間、それを実感した。

人間がいかに関心したことしか頭にない生き物かを、ここまで堪能できる場所もそうはないからだ。

そして、その否応ない事実をより苦々しく味わえる場所へ、シジの足は向かう。

今日も。昨日とまったく同じ歩調で。

気の乗らない心とは裏腹に、その足には迷いはない。どうやらこれは、すでに習慣のひとつとして体に染みついてしまっている。

「……まったく。嫌になるな」

そのため息は、霧散して冷たい廊下に消えた。

廊下は長く入り組んでおり、天井より吊された簡易式ランプらの頼りない光だけが僅かに足元を照らしている。

床や壁はぼんやりとした視界でも確認できるほど黒く変色し、あまりの汚れから、衣服が建物へ触れることさえためらわれるほどだった。

シジは、木造特有のギシギシとすべりの悪い音を鳴らしながら歩く。

やがて狭く暗い廊下は終わり、開放された巨大な空間へとシジは

踏みこんだ。

ここが私の目的の場所。

同時に、眩しいばかりの光がシジを照らし、反射的に目を瞑る。

途端、歓声が上がった。

それも一つ二つではない。

絶叫とも取れるほどの猟奇的なまでの歓声の波が、堰を切ったようにシジへ向けられる。

両の鼓膜を殴りつけるそれらを発するのは、シジの遥か上の高さから彼を見下ろす大量の人の群れ。

数にして、三万人をゆうに超えるであろう大衆が、今この場所には集まっていた。

ほら見る。世の中、酷く腐っている。誰も彼も救いようのないほど狂ってしまっている。

シジは吐き気のある危うい感覚を、轟音に震える五体で味わいながら、ステージの中心へと向かった。

「長らくお待たせ致しました。……ショーを再開しましょう」

常軌を逸した歓声にたじろぐことなく、シジは片腕を水平に切り、観客に向けて仰々しい会釈をしてみせる。

その芝居がかった演説と仕草により、いよいよをもって歓声は暴力的なまでに膨れ上がった。

ここは海に囲まれた小国。国の名前など、国民だれもが忘れてしまった、そんな国。

敗戦国となった二世紀前から、みるみるうちに豊かだった文化は廃れ、人間としての誇りは消え。今では処刑を見せ物にするぐらいでしか、この国の民の脳は働かない。

私の呼び名はN o . 4 4。守人もりびとと呼ばれる処刑人の一人として、この国の歪みゆがの中心にいる。

羊を狩る者2

処刑所は、ここに通ずるまでの古い廊下とは違い、床も壁も大きな柱も、全てが豪華な石造りとなっている。建物全体の構造は楕円上を成しており、どの位置から下部中央に位置する舞台を等しく眺めることができる。

どれをとっても、場に適した構造だろう。

「ヘルマン・ドミニク。ラボック・シュタイノ。アルバート・ロ
ー」

シジは罪人の名前を紹介し、彼らと向き合う。

罪人たちはすでにシジの到着より前に舞台へと運ばれており、人数は三名、透明な四角張りのケースの中で佇んでいた。

年齢はある程度まちまちのようだが、顎髭あごひげや頭髪とうはつがろくに手入れもされず伸び放題な外見から、皆老人のようにも見える。

表情は硬く、一目見ただけでも彼らの不安な様子がありありと伝わってきた。

さて。

眩しさにやられていた目も、この頃にはおおよその視力を取り戻すことができただろう。

ここから先は、私の役目。

前の刑を担当していた守人と入れ替わるようにして、シジは舞台の進行を預かり受けた。

一步、また一步。シジは人ひとりが制すには広すぎる空間を歩き、罪人と一定の距離を保てる自身の定位置に立つ。

「この者たちの犯した罪は、彼のラドック子爵つぎやくの所有する土地への度重なる木苺の窃盗罪。約五年間に渡るその大罰。今宵No.4

4が、この罪人たちを裁きにおかけいたしましょう！」

客たちを見上げながら、シジはいつものように饒舌じやうぜつにまくしたてた。

シジのその声は、舞台中心の拡声器や会場内に設置されている個々のスピーカーによって波紋のように広がり、会場内の空気がどつと動く。

笑い声やそれを通り越した奇声、あるいは耳を背けたくなくなるような罵声が、次々と途切れることもなく罪人たちに降り注いでいく。

「……………！」

「……………！？」

「……………！！」

罪人たちの様子は、三者三様といった具合。

ただ呆然としている者、泣き崩れる者、怒りに奮える者。彼らの反応は、個々の性格を表していた。

「……………！！！！！！」

とそこで、怒りをあらわにさせた一人の罪人が、恐らく怒鳴り声を上げながら、四角張りのケースを内から叩く。しかし、こちらからは完全に防音となっているため、彼の言葉さえも会場の誰一人に届くことなく消えてしまう。

だが私には、彼の言わんとしていることがわかった。

「私は悪くない。無実だ」大方、そんなことを叫んでいたに違いない。

確かにそれはごもつとも。記録から読み取るに、彼らは罪を犯し

てはいなかった。

彼らの罪状は、数年にも渡る木苺の窃盗罪だが、ラドック子爵がその土地の権利を手にしたのはつい先日。それ以前のその土地は、管理者のいないただの荒れ地だった。

そして罪人たちには、ラドック子爵の土地となつてからは、この場所へ入っていないというアリバイもあるようだった。

つまりは、今回の件は子爵側の言いがかり。私たちは金持ちの道楽の片棒を担がされたにすぎない。

だがそんなことは、今となつてはどうでもいい話。

罪人たちがどう抵抗しようが、刑は既に決定していて、それは覆ることはない。

免罪だろうがなんであれ、本物の犯罪者を刈り尽くした国にとって、その悲劇はありがたい話にしか映らなかった。

羊を狩る者3

この国の死刑の行い方は様々ある。

守人ですら、その十分の一を把握するのがやっとなほどに増えすぎてしまっていた。

その原因は、この国そのものが死刑を見せ物にし金を取ることを認めてしまっていることにあるのだが、一番の要因は、死刑執行に世にも珍しい呪いを使うことにあった。

「この度、罪人達にかけられた刑はただ一つ。その身を滅ぼす第二級刑罰、消滅の刑」

死刑には、第一級から第三級まで位が分かれており、それが上級なほどに無惨な最期を遂げることになる。

この罪人たちもその数ある死刑の中から、第二級刑罰の類である“消滅の刑”によって処されることに決まった。

シジが死刑方法を告げると、予想通りに客席は盛り上がる。

対する罪人は、今度は三人とも啞然として言葉を失っていた。先ほどまで熱り立っていた罪人なんぞは、まるで立っていた足場を失ったかのようにバランスを失い、あってはならない倒れ方をする。

すると、それを観ていた観客達はその哀れな者に指を差し、さも愉しそくに笑うのだった。

皆、同じ顔をしていた。

人ではない何か恐ろしいもののよう、口の両端をつり上げ、歪みきった心を垂れ流す。

「……執行！」

「「「！！！！」……」」」

その光景に耐えかねたシジは、せめて早く終わらせてしまおうと刑を最終段階へと移らせた。

シジの声と共に、四角張りのケースの中には怪しげなガスが送り込まれていく。

ガスは、観客たちの目からでも確認ができるように、薄い緑色をしていた。

逃げる場所などあるはずもなく、閉じられたケースの中で、罪人はそれを容赦なく吸い込み続ける。

そろそろが頃合いか。

しばらく待つてから、シジは微かな変化を感じ取り、ケース内の防音を解いた。

「……ひっ！」

すると防音の解かれたケースの中からは、途端に罪人のしゃくりが上がった。

「……ひっ！ ひっ！」

次々と途絶えることなく、罪人たちはしゃくりを繰り返す。

彼らが未だケースの中で死に至っていない様子から、緑のガス自体に致死性はないことがわかる。

だが、その時すでに罪人たちの身には、無視できないほどの異変が起こっていた。

「……ひっ！ ひっ！」

驚くことに、彼らの容姿は、しゃくりをする度にみると若返っていく。

煙の中で数秒見失ったかと思うと、次に彼らがケースにへばりつき顔を見せたときには、あまりにも別人の顔になっているくらいだ。

三人の容姿は恐ろしいほど変化していった。

これは、いわゆる年齢退行の呪い。退行条件は、もちろんそのしやつくりによつて。

緑のガスは、彼らの命を直接奪うためのものではなく、おうかくまく横隔膜を痙攣けいれんさせしやつくりを誘発させるために使われた気体。

種明かしをしてみればなんてことはない単純なものだが、これには抗えるはずもない。

「ひつ……ひつ！ ひつ！」

それからしばらく、息も絶え絶えに三百回余りしやつくりを繰り返した罪人たちは、ものの三分で二十半ばまで若返ってしまった。そうしてここからが、この死刑の本当の見せ場の始まりであった。

「ひつ！ た、助けてくれ！」

若さを取り戻し、生に未練を抱いた罪人たちが、一斉に四角張りのケースに体当たりをし始める。

普通ならば、執行人はそれを妨害しなければならない。

しかし、守人であるシジは、それをしようとはしない。むしろ、一見すると彼らを見守っているようにも見える。

可笑しな話ではあるが、じつのところ、見ている者がそう感じるのもあながち間違いではなかった。

つまるところ、これはゲーム。

年齢より、呪いで減らした歳の方が勝ってしまった場合、罪人たちの存在は跡形もなく消えてしまう。

だがその最悪な事態が起きる前に、このケースから無事脱出する

ことができたのならば、彼らの命の安全は約束されることになっていた。

これは観客をより楽しませるための余興のようなもの。しかし、シジは知っている。

このゲームは、勝者が一方的に決まっているゲームだということを。

ようやくガラスの割れるような耳につく大きな音が鳴る。

たった今の罪人の体当たりで、ケースに幾つかひびが入り、一ヶ所に小さな穴が生まれたのだ。

「よし……いける。……ひっ！ いけるぞ！」

罪人たちはそれに気づき、なにやら勘違いをしているようだが、これはあらかじめそのように仕組まれていた。

より客を楽しませられるように、わざと脆い部分を作っている。そして、その穴が人の出られる大きさに達することはありえない。

そのように、私が計算して作った入れ物なのだ。

脆くない部分は、人間の力ではひびすら入らない素材。

案の定、罪人たちの姿は、わずかの時間の間に四角張りのケースから消えてしまった。

最後の数秒、緑の煙の中から赤ん坊の泣き声が聞こえたような気がしたが、それは恐らく気のせいではないだろう。

「執行完了。皆様、彼らに盛大な拍手を」

シジが客たちに拍手を促すと、彼らは皆満足げにそれに従い笑っていた。

この国では、どんな罪人でも刑さえ受ければ罪は消えるという考え。

なので、今の彼らにとってあの罪人たちは、自分たちを楽しませ

てくれたピエロのような存在なのだろう。

ぱちぱちぱち……。

楽しかったよ。ありがとう。

沢山の拍手からそんな思いが伝わってきて、シジは気持ちが悪くなり、早々に舞台を降りることにした。

皮肉にも処刑所の拍手は、そんなシジを称えるように、彼が舞台を降りてからも止むことはなかった。

羊を狩る者 4

「……くそっ！」

廊下へ降り、処刑所の喧騒もいくらか遠退いた辺りで、シジは我慢ならず額を壁に打ち付けた。

渾身の衝撃は、顔を覆う分厚い面でも和らぐことはなく、期待どおりの痛みをシジは負う。

その痛みを飲み込みゆつくりと目を開くと、先ほどの吐き気は収まっていた。

額が割れ、鼻の辺りにまで血がうつすらと滴ってはいたが、今はそれを気にする気力もない。

建物の汚れすら忘れたかのように、シジは壁にぐったりともたれかかる。

気分是最悪だ。慣れることのない罪悪感。疲弊を繰り返す精神。

どうしたって私には、守人という役職を理屈で割り切ることはできないらしい。処刑執行後、シジは毎度今のようにそれを痛感する。元来の私のこうした性格は、守人として十年という年月を生きたところで、矯正されることはなかった。

いっそ全てを忘れ、欲望のままに狂えてしまったら、どれほど楽になれるのだろうか。

絶望の淵に沈みながらも、それでも逃げる^{ふち}ことが許されないシジは、そう内心で毒づくばかり。

「おやおや。これはまた一段と滑稽^{こっけい}なことだ」

とここで、気配もなく陰から男の声が届いた。

気分が晴れない時に、不意にその気持ちに割り込まれた時ほど気の滅入るものもない、とシジは思う。それが自分が苦手と思う相手

ならば尚更だ。

シジは苦々しく振り返る。

さて、どうするか……。関わり合いたくない部類の人物に絡まれてしまったようだ。

望まない呼びかけに振り返った先には、趣味の悪い不気味な面を付けた小男がいた。

酷く背筋の曲がったその男は、静かに床を軋ませながらこちらにへと近づいてくる。

男の面は、幾多の受刑者の返り血よって山葡萄やまぶどうを思わせる黒みがかったワイン色に染まっており、視界を確保する為の覗き穴が付近等な場所に五つもあるという、どうにも病的な仕様を成していた。まるで、持ち主の性格がにじみ出ているよう。

ナンバーゼロイチ
「No・01……あいにく今は気分が悪い。用があるなら手早く済ませてくれるか」

「それは失礼。ただ、私はNo・44の偽善ぶりに感心していたところでねえ」

「なんだと」

「この偽善者めえ……」

男の呼び名はNo・01。守人としてはまだ新米だが、残虐かつ非情な刑を行うことに異常なまでに固執しており、客からの人気は高い守人ではある。

が、そこまで極端に猟奇趣味に偏った男が、仲間内からどう思われているかは想像するに容易いだろう。

もっとも、その空気に気づいているはずのNo・01の口元は、いつだって嫌な笑みを浮かべているのだが。

そう。現に今だって。

「おっとお。気を悪くなさったなら失礼」

No.01はまだなにか言いたげだったが、シジが睨むと降参とばかりに両手を上げ、ふらふらとした足取りで死刑所の方へと去っていった。

守人が死刑所へ向かう理由は一つしかない。No.01が、次の舞台を仕切る役目を担っているのだろう。

偽善か。

自覚はしているが、いざ他人からそれを言われてしまうと、胸に痛いものがある。

シジが罪人を哀れに思う気持ちは、まさしく偽善と言われるものなのだろう。

なにせシジは、罪人に客が喜ぶよう呪いをかけ、それを自ら執行し金を受け取っている身分だ。

同情できる立場ではなく、同情などしてはいけない。

だが、偽善の気持ちが絶える日は来ない。

どうか。どうか許してくれ、と内心では都合のよい謝罪を並べている始末。

なんて自分勝手な生き物なのだろうか。

あの客席にいる奴らと私は、何も変わらない残酷な人間だというのに、心の裏側ではその事実を認めず偽善な考えを持て余している。

……どうしたって成長しない男だな、私は。

シジは、一人ごちに呟やく。

陰鬱な場所にとどまっていると、思考は上限なく滅入ってしまうらしい。

シジはそのいい例だった。自身のマイナスと他から受けたマイナスで、終わらない悪循環に満ちている。

「……帰るか」

気を取り直すための咳払いの後、伏し目がちになっていた目線を正した。

こんな日は、早く家路に就くに限る。

本日の私の守人としての役目は、あの三人の処刑を以て滞りなく完了している。ならば、ここで余計な考えに捕らわれることもないはずだ。

壁に額を打ちつけた際に少しずれてしまっていた面を整え、シジはまた廊下を歩きだす。

やがてたどり着いたのは建物の出口ではなく、守人たちの控え室の前。

守人がこの施設から出るには、五つ以上の控え室を通り抜けないと出られない構造になっているから当然か。

控え室に一步入ると、さ迷っていたであろう部屋中の視線はシジの方にさっと集まった。

すぐにそれはシジから離れていったが、居心地の悪さは変わらない。

シジは意識して歩調を早め、控え室を通り抜ける。

その際、何人かの守人がシジを追うように席を立ち、物言わず後に付けてきた。

まるでつけられているようで不快だが、彼らに害はない。

守人は職業柄、不特定多数の人間から恨みを買いやすい。当然、常に暗殺の危険が伴う。

よって、その目くらましとして彼ら^{ナナシ}No.00はいる。

彼らのことは守人の影武者、裏方、あるいは守人見習いといった方が的確だろうか。

守人を次の控え室まで、安全に送り届ける役目。

まだシジがここに来て間もなくの頃は、彼らと同じ役目を担っていたこともあった。

次の控え室に付いた時、そこで何人かが新たに入れ替わり、また同じだけの人数がシジの後をつけてきた。時に彼らはシジを追い抜く者もいるし、別れ道で他のルートへ消えていく者もいる。

そうやって、それを何度か繰り返す内に、シジと彼らの見分けはつかなくなった。

「おー、おいおい、ちょっと待った。その集団の中にN o . 4 4 はいるか？」

だが最後の控え室を通り抜けようとした時に、シジを探す者と運悪く遭遇してしまった。

いやにがたいのいいその大男は、一切の反応を示さない集団の中から要領よくシジの姿を見つけると、人の流れを無理やりかき分けながら歩み寄ってくる。

「私は一刻も早く帰りたいんだが……何の用だ？」

「あつはつは、悪い悪い。まあそう警戒しないでくれ」

シジを捕まえ安堵したように笑うその守人、ナンバーゴゴN o . 5 5 は、ばつの悪そうに頭を掻きながらまず最初にこう切り出してきた。

「いや、なんだ……勤務の後にすまないが、ちょっとばかり厄介事を頼まれてくれないだろうか？」

羊を狩る者5

煌々くわくわくと降る照明からの光。

舞台上に散りばめられていくそれらは、ある意味ではこのショーの主役だろう。処刑器具らを狂気なまでに際立たせてくれる。

器具はどれも使用前と使用后、また舞台上かそうでないかによって見せる顔が違ってくるから不思議だ。

まるで意思のある生き物のよう。

私はショー目前の独特の薄ら寒さと緊張を肌で感じながら、四方から伸びる鎖によって宙に吊された透明のケースを見上げた。

底がない形状のその入れ物は、その口が罪人で満たされる時を今か今かと待ち望んでいる。

大きさに関しては、本日先に使用した多人数用の入れ物とは違い一回り小さい。

だが念には念を入れ、今回の処刑で使用されるこのケースは、脆い設計が一切されていない特別製であった。

「……遅いな。やつらいつまで待たせる気だ。確かに、慎重厳重な護送をするに値する罪人ではあるとは思うが……」

あれから数時間後のこと、不本意ながらまたこの死刑場の指揮を執っていたのはシジだった。

本日のメインイベント。

半ば強制的にNo.55から押し付けられたのは、重要な仕事の代行であったからだ。

聞けば、シジ以外では変わりの務まらない罪人が急遽でたということらしく、そのまま無碍に断るにもいかず引き受ける流れになっていた。

そして、メインらしく今日の取を任されることになったのだが――

「しかし……遅い」

先にも延べたが、この国の処刑方法は多種多様。そのせいで個々の守人が好んで使う呪いの種類も様々になり、他の守人の処刑を途中で引き継ぐことは通常できない。

だが稀に扱うことのできる呪いが被ることもあり、現に今私はここにいる。

当初のこの処刑担当の男は、シジの古くからの知人で守人としての腕はいいのだが女癖が悪く、それが絡むと仕事に対しても極端にルーズになるという前科を持っている。

大方今頃、どこぞの女の家にも上がり込んでいるのだろう。

面倒な仕事は私に放り投げて、いい気なものだ。

おかげでシジは、今から本物の殺人犯を。それも“守人を殺した”とされる、前代未聞の凶悪犯の処刑を引き継がなくてはいけなくなったというのに……。

守人殺し。

それはシジたち守人にとって、また犯人にとっても不運な結果だった。

守人の正体は、彼らの安全のために国ですら意図的に把握していないのだから、狙って殺せるものじゃないし、逆に言えば狙ってターゲットから外すこともできないからだ。

そして国の英雄である守人殺害の罪は、無慈悲にも非常に重いものとなっている。

刑にして、第三級、第二級、そして第一級の呪いがそれぞれ一つずつ、計三つの呪いがいつぺんにかけられてしまうのだ。

これは惨い。

無惨な最期は必須。ならばこそ、護送中に必死な抵抗もすることだろう。

だが、それを差し引いたとしても、あまりにも罪人の到着は遅す

ぎた。

いい加減客たちの痺れが切れ、下の様子を伺わせるためシジが遣いの者を出そうかとした時に、処刑場のざわめきを裂くようにしてようやく彼女は現れた。

シジは驚きのあまり息を呑む。

それが“女”であることを知らされていなかったことが、シジが驚いた理由でもあった。しかし、予想に反したことはそれだけではない。

こつ、こつ、こつ——と。面を付けた大柄な四人の男たちに手荒く先導されながらも、目隠しをされたその女は、じつに悠々たる足取りでシジの待つ舞台へと上がったのだ。

シジには、女のその潔いまでの態度から、とてももうじき死にく者とは思えないどこか凜とした生が感じられた。

罪人が女と分かるや、猿のように吼える客たち。

「……」

そんな中で、一人シジは疑っていた。女が罪深い罪人であることを。

それも無理はない。

なぜなら、自殺防止用の猿轡さるへつわや目隠しをしているにも関わらず、そこから僅かに覗く容姿から感じ取れるほどに、彼女の姿は美しかったからだ。

羊を狩る者 6

キル・フェイダノールト。

それがその殺人鬼の名だった。

女の服装は独特なもので、どこかの民族衣装のような見慣れない派手な布を纏うのみ。胸や太ももなど露出の多いそれは、女の理想的な肉付きも相まって目のやり場を困らせる。

きつく後ろ手に縛られたか細い腕や顔を覆う拘束具も、見ている者の背徳感を刺激し、それらを助長させた。

フェイダノールト、フェイダノールト、フェイダノールト……。

どうもここらでは聞かない姓だ。

やはりというか、該当する名前はどの住民票にも存在しておらず、女の正体は不明。

身分を証明できるようなものにも持っていないく、キル・フェイダノールトとは、所謂本人がただ自ら名乗っているだけの証明のない名前だった。

偽名、という可能性もあるだろう。

「お気をつけて」

女の受け渡しの際に、護送人から意味深な一言を添えられ、惚けていたシジははっと現実に帰る。

いかんいかん。

罪人がどんな人物であれ、私のすることは一つ。なににも変わらない。

ただ、確実に殺すこと。

それ以外に私が頭を回す必要はない。

浮ついた意識を鎮め、感情を殺し、シジは守人 No. 44 として徹するよう切り替える。

「来い、キル・フェイダノールト。客に御披露目だ。その窮屈そうな目隠しと猿轡、外してやる」

シジの声は熱狂溢れる歓声の中でもつつがなくキル・フェイダノールトに届いたようで、女は声をたどり、自らの足で護送人のもとからシジの方へと歩いてきた。

距離にして、たった三步ほどの長さ。

が、その短くも確かな距離は、罪人が完全に護送人の手から守人の手へと移ったという事実を表している。

つまりこれからの責任は、全てシジが持つということ。
自然と鼓動は高鳴った。

「失礼」

シジはできるだけ驚かせないように、そう前置きをしてから罪人の背後に回り、その縛りに手をかける。

多くの場合、刑を間近に控えた罪人はヒステリーをおこしている
ので、触れた途端に暴れ出すこともままある。

しかし、躊躇なくシジの指は女の肌に触れ、刹那会場中の誰もが
息をのんだ。

が、今回それは杞憂に終わったよう。

女の顔を隠していた戒めの器具らは、重力に従いごとりと床に落ちる。

それらに絡まり乱れ屈曲していた女の黒髪も邪魔がなくなったと分かるや、ばさつと快意な音を立てて本来の長さへと計りを戻した。
そして歓声は轟く。

シジも内心で感嘆する。

キル・フェイダノールトの素顔、それは万人の期待通りのものだったからだ。

まず客たちの目を引いたのは、小麦を彷彿とさせる女の健康的な褐色の肌。つづいて、腰に届きそうなほどの長く艶のある黒髪。最後に、妖艶で整った容姿とくれば、彼らが興奮するのも頷ける。

客層は十中八九男が占めているから、当然といえば当然の反応。だがそれを差し引いても、同性の目すら奪うであろう鮮麗さをキル・フェイダノールトは備えていた。

「貴様が、あたしを殺す男か？」

「……」

「ふうん、つまらない男」

「……黙って歩け」

罪人は満を持して処刑台に上がった。

役者は揃い、こうして緩やかに刑は動き出していく。

シジは女の物騒な質問をあしらうと、中央へ向かうようその背中を押し促した。

中央にあるのは、例の吊り上げられた入れ物。その真下には木製の椅子がポツンと備えられており、シジはそこにキル・フェイダノールトを座らせ、今度はその椅子に後ろ手になるよう女を縛り付けていく。

決して解けることのないように、強く。強く。

縄は女の腕の骨まで食い込むほどの固さで巻かれ、その姿は痛々しい限りだった。

だが、こうまでされてもキル・フェイダノールトは無抵抗と呼べるほど大人しく、この段階にくるまでに抵抗の一つもなかった。痛みに悲鳴すら上げやしない。

既に諦め切っているのか。女の落ち着きようは、美しさも仇にな

り返って不気味なものを感じさせた。

「……小娘相手にやけに慎重なこった」

「だからこそだキル・フェイダノールト。いい絵になるだろう」

「くくく、なるほどな」

シジは慣れた手つきで女を縛り終えると、僅かの会話を交わした後に入れ物の蓋を閉じるよう指示を飛ばす。

透明のケースは女を覆い閉じ込めるためにつつがなく地面へと降り、隙間なく床に固定され、外界から完全に罪人を隔離する。

その様子を見届けた後、シジは客席をゆっくりと見渡しながら大きく息を吸いこんだ。

さあ、始めようか。

そして、早く終わらせてしまおう。

「皆様、御静粛に」

処刑の準備が整うまでの待ち時間は、客各々がそれまでの暇を好きに潰す。

三万人が暇を潰すため好き放題に騒いでいるのだから、シジの言葉を受けてもなお、場が完全に静まり切ることはない。

だがそれで十分だ。

皆、処刑の始まりには気づいている。

罪人の悲鳴が聞こえなくなっているのは客自身。いよいよの時には勝手に黙るだろう。

いつもと同じくそう踏んだシジは、構うことなく進行を続けた。

「この女、罪人の名はキル・フェイダノールト。彼女の犯した罪

は、食い逃げが過去数百件以上。民家へ侵入し、食料を奪うなど五件。他にも下着泥棒と呼べる貧相な行為を二十件余りにも渡って繰り返している」

女の美しさと、犯した罪の間抜けさにギャップがありすぎたのか、罪状を述べていくほどに会場には笑いが起こった。

だがそれらの笑いは、最後の罪状を述べた際に、ぱっと途絶えることとなる。

「これらの罪に加え、殺人罪が一件」

やはりというべきか。会場はどよめきに包まれた。
この場合、期待の意味を孕んだどよめきによって。

「一昨日の深夜、キル・フェイダノールトによって、一人の男性が殺害された。被害者の名前は……。なにかの薬物を使ったのか、彼の遺体は、体の内側……内臓という内臓だけがどろどろになるまで溶かされており、自宅の寝室で無惨にも絶命しているのが発見された。今宵この悪魔じみた殺人鬼には、その報いに見合った死を……失礼。このNo.44によって、公平な裁きにおかけいたしましたよう」

シジは決め文句の最後の最後をわざとらしく間違え、強調の意を込め訂正してみせた。

裁き。

それは、生きる価値があるかどうかを計る公平な裁きであり、神に試された罪人を見守るための神聖な儀式のことである。

しかしそんな表上の名目など、シジは糞喰らえと吐き捨てる。

シジだけではない、内心では誰もが腹を抱えて笑っていることだろう。

なぜなら、無実の者でさえ、見せ物として殺されていくのがこの道理であり、本当の意味での罪をもつ者がこの国の処刑で助かるはずがないからだ。

「くくっ……あーっはっはっは！」

他をかき消すほど音量で、異常なまでにそれは響いた。

「あーっはっはっは！ ひっひくっ はははははははははは

」!

この異常事態に、シジはいち早く危機を察し、すぐさま笑い声の主を突き止めるため会場全体を見渡した。そしてその視線は罪人の女へと固定される。

女は透明なケースの中で、椅子に縛り付けられた格好のまま、息の続く限り笑い続けた。

「……何が……おかしい？」

「くくっ。ああ、おかしいさ。貴様らの反応がな。あたしを異常者を見るような目で見る。自分の事は棚に上げて。これ以上面白い冗談はないだろう？　なあ！」

シジの質問に女はそう答え、今度は声もなくにやりと顔を歪ませる。

その笑みは、ここにいる私達とは何かが根本的に違うもの。私達のように、歪に歪んではない。しかし確実にその笑みの奥底には、私達以上の恐ろしいものを潜めていた。

「……い、以上の大罰の数々。特に、殺人罪などはもつてのほか！　よって、この野蛮な女には、同時に三つの死の裁きが下されます。皆様、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい」

不敵に笑う女を背に、シジは刑の執行を急ぐことに決めた。

「……………」

普段ならば、この死刑を告げる際には、必ず観客達からは声援や笑いが上がる。

それはもう、耳を塞ぎたくなるほどに盛大に。

「くくっ……あはははははは！」

だが、今回は上がることはなかった。
罪人自らの笑い声を除いては。

羊を狩る者7

「この度、罪人にかけれし呪いは計三つ。偽りの代償を支払う第三級呪術虚偽きよぎの刑。その身を滅ぼす第二級呪術、消滅の刑。……そして、げき恐ろしき第一級呪術、廻転かいてんの刑」

シジは告げる。

虚偽。消滅。廻転。

観客の不安を払うために、キル・フェイダノールトにかけられた呪いの名を。

その何れも質の高い高等呪術であつたおかげか、辺りからは歓声もちらほらと上がり始めてきた。

愉快。愉快。滑稽。滑稽。

さすがにここまでの位の高い呪いが一斉にかけられたのでは、いくらあの女の得体が知れなかうと生きてはいない。そう客たちは踏み、安心し、やっと純粹にシヨールを楽しむ氣になったのだらう。

「くくくくくく」

だがそれでもなお、女の態度が変わることがない。

仰いで天に恥じず。キル・フェイダノールトの目に映るのは、恐れや怯えなどではなく、純粹すぎる興味のみに。

今からどんな目に合うか楽しみで仕方がない。そんな様子。

「くく……なあ、No.44。前置きはいいいから早く始めないか？」

シジから異様なものを見るような侮蔑ぶへつの視線を受けても、キル・フェイダノールトは目じりをキュツと細め、さも愉快そうにくつく

つと笑ってみせる。

その見た目だけでいえば、陰りのない無垢な少女のそれと同じ。それ故に……いや、それだからこそ、この女は非常に気味が悪いなるほど、やはり異常者か。だが見せ物にするには、このぐらい印象強い方が都合はいいだろう。

それに凶悪犯罪者が変わり者であっても、なんの不都合も矛盾もない。

「執行！」

シジの刑執行の合図を受け、女を閉じ込めているケースの中には一斉に緑色のガスが吹き込んでいく。

こうなれば、あとは放っておいてもことは運ぶ。

だがシジら守人にとつて、死刑とはパフォーマンスそのもの。

残酷さもさることながら、なにより大切なことは、いかに魅せるかにある。

「くくっ……ひっ、ひっ」

ガスがケース内に噴出されてから間も無く、女の笑う声に少しずつ例のしゃっくりが混じってきた。

なんだ。息を止めるなどの抵抗もしないのか。

ケースの中はいつもどおり滞りない様子。

シジは内心拍子抜けだった。

てつきり何かしらの抵抗はあるものと考えていたので、肩すかしをくらったよう。

しゃっくり。消滅の呪いについては、その進行の引き金があまりに露骨で、刑の最中罪人がそのことに感づくことも多い。必然、抵抗する者もでてくる。

だがまあ、なににせよ引き金を理解したところで、現状を打開す

ることは罪人には不可能。

内通者が守人に紛れ込んでいない限り、罪人が自力で生き延びることなどあり得ない。

ほっと、内心のため息が漏れた。

疑り深いシジの警戒心もここにきてようやく解け始めてきたようだ。

「……ひっ、ひっ」

動くにはそろそろが頃合いだろう。

刑をより娯楽として価値のあるものに変えるために、シジの口は女に狙いを定める。

女の年齢は、見た目からして二十半ば。

このぐらい若ければ、消滅の呪いによって刑は一瞬で終わってしまふ。

これでは盛り上がり欠けることは必至なので、今回キル・フェイダノールトの刑では、使用するガスの量が大幅に減らされていた。今回のメインは、あくまで第一級呪術の回転の刑。

客達を満足させるためにも、罪人には一番むごたらしい結末が相応しいのだ。

第一級呪術の回転の刑とは、瞬まはたきをする度に罪人の首が一度ずつ、右を向く呪い。

瞬きをするごとにその度数は増えていき、八十度を超えた辺りで首の腱は限界に達する。それが九十度に曲がると、今度は呼吸困難を起こし、百度が近づく意識を失う。

そして、それ以上にまで刑が進むと、あり得ないほどに歪められた首の骨が遂には鈍い音を発して折れ、ようやく罪人は死に至る。

さすが第一級呪術というべきか、非常にえげつない。

だがこの刑の恐ろしさは、罪人が死に至ってもすぐには終わることはない。

たとえ命は尽きていても、瞬きという行為を止めることはできないように呪いの補正がかかっているからだ。

罪人の体は絶命後もしばらくは痙攣を続け、呪いと無理やりに応じ続ける。

するとどうだろう。

罪人の首が一回転し元の位置を少し越えた辺りで、ぼとりと頭は地面へと落下し、それは自らの体を残し床を転がることになる。

まさに最高の見せ物。

女がその未来を辿るのも時間の問題だ。

……すまないな。

第一級と第二級の呪いが実行されている中、シジは女に追い討ちをかけるように第三級の呪いを紐とく。

私という性格上、女、子供にこのような容赦のない刑を執行する際の罪悪感はひとしおで、また心内の偽善感は暴れだす。

椅子に縛り付けられ、そのまま力なくうなだれる女の悲痛な姿も、それを助長された。だがしかし、

「……おい貴様！ 顔を上げろ、いますぐに！」

今回その思いは止まった。

驚きによって。

「くくくくく」

有り得ない！ 有り得ない！ 分からない！ 分からない！ 分からない！ 分からない！ 分からない！

女は目を閉じていた。

そして、静かにこうつぶやいてみせるのだ。

「第一級といえ、たわいもないな……くくつ、貴様驚いたか？」

なあ」

なんだこれは……有り得ないっ！

シジは、目の前の光景が信じられなかった。

「なぜだ！？……どうして。どうしておまえがそれを知っている！ キル・フェイダノールト！」

必死の形相で怒鳴るシジの姿を見るためだけに、一度だけ女は目を開いた。

そして、目の前のさぞ間抜け面な男をじつくりと堪能したのち、女は満足げに再び目をつぶる。

「あーっはっはっは！ さあな。自分の頭でよく考えてみる」

キル・フェイダノールトは目を閉じた。

これにより、回転の刑は事実上執行不可能になってしまった。目を最初から閉じていたのなら、瞬きなどできるはずもない。

確かに呪いの性質さえ知っていれば、理論上このようにして避けることはできる。

大半の人間はパニックを起こし、瞬きをできるだけしないよう目を精一杯に開けようとするのが普通だが、何人かは目をつぶるという突破口を発見するかもしれない。

だが、それはあり得ないことだ。

なぜなら、呪いは門外不出。

どのような条件で呪いが進行するかなど、私達守人以外知るはずもない。

自力で気づくことも不可能。

消滅の呪いのように、しゃっくりという気づきやすい条件ならまだしも、無意識間で行われる瞬きという行為が条件になっているこ

となど、絶対に気づきようがないからだ。

それゆえの第一級呪術。皆、何が呪い進行の引き金になっているか模索し、答えに辿り着けず、恐怖に震え死んでいく……通常ならば。

「質問に答えるんだ、女。いや、キル・フェイダノールト。おまえには答える以外に道はないぞ。答えなければお前の寿命はすぐに底を尽きる。それも一瞬でだ」

「ああ？ 何を偉そうに」

シジの頭に浮かんでしまった数々の悪い予感。

その正否を確かめるためにも、シジは第三級呪術を執行した。

「お前にかけられた第三級呪術は真実の刑。これは即ち嘘偽りを禁ずる刑。私の質問に正直に答えなければ、その度にお前の寿命の半分がその呪いに喰われる」

「ひつ……あー。そういやそうだったな」

「黙秘しようとはするなよ。排出するガスの量は私の判断でどのようにも変えられる。短い命とはいえ、少しでも長く生きていたいだろう？ キル・フェイダノールト……」

「くく……それは困る。あたしはまだこの舞台を楽しみたいんだ」
女の態度から、まるで真実の刑の内容すらも知っていたかのよう。一体全体なにがどうなっているのか……。

恐らく、この処刑所が作られてから初の大異常事態。場合によっては、この国の守人や呪いに対しての守秘義務の信頼性が問われることになる。

だが混乱はあれど、女への主導権は今シジが確実に握っている。
幸い、真実の刑という都合のよい呪いがキル・フェイダノールト
にはかけられているし、女もまだ死にたくはないようだ。

それを最大限に利用していけば、このカラクリの種も聞き出せる
はず。

呑み込まれそうなほどの、女の底知れぬ覇気と気味の悪さを正面
から受け止めながら、シジはことの真に迫る。

「おまえは呪いについて詳しいようだが、それはなぜだ？」

「もちろん聞いたのさ。守人のNo.30とNo.29にな。二
人とも丁寧に教えてくれたよ。くくくく……感謝しなきゃあなあ」

「No.30と、No.29だと」

思った通り、キル・フェイダノールトは素直に答えた。

だが、その返答内容は予想に反したもの。

No.30とは、元々女の刑を担当していたあの守人。

理由はまだ聞いていないが、女に呪いだけをかけ、執行すること
なく刑を投げ出した人物。

確かにこのキル・フェイダノールトは、あまり関わりたくはない
種類の罪人ではある。だが、たったそれだけの理由で守人が職務放
棄するとは考え難い。

単純に女絡みの事情で、刑を放り出したのではなかったのか……？
では、なぜだ。

No.30は、結果的に私に良いとこ取りをされるはめになっ
てしまっている。

また、No.29にいたっては女との接点すら分からない。

シジはぐるぐると自問してみたがどうにももちが明かず、短刀直
入に女に尋ねる。

「キル・フェイダノールト……、貴様No.30に何をした？」

「くく、No.30か。そうだな、男としては生きられない体にしてやった……と言えば、貴様になら分かるだろう？」

「な！……」

なんとということかつ！

それだけで、No.30をよく知る私には事態を理解することができた。

そうか。そうだったのか。No.30は、よりにもよってこの女に手を出そうとしたのだ。

No.30の女癖が悪いのは昔からで、罪人が女とみれば好き勝手。

私にとって彼は、上司というか……実をいうと兄弟子にあたるため、目に余ることがあってもそれを口に出すことは許されてはいなかった。

恐らくNo.30は、この女に呪いをかけた後、女の恐怖に歪む顔を楽しみながら事を済ませようと、女自身に詳しく処刑内容を教えたのだろう。

「No.44。色事に無縁なおまえには一生理解できんだろうが、俺は強気な女ほど、悲痛に歪んだ顔を拝みたくなるんだ」

以前、彼が私に自慢げに話していた内容だ。

馬鹿が。

堕ちるところまで堕ちたとはこのこと。

あげくに女に返り討ちに合い、男としては生きていけない体になれたらしい。

少し哀れにも思うものの、良い気味だと思う自分の本音は否めない。

羊を狩る者 8

「N O・30のことは分かった。では、N O・29とお前の接点
は？」

一つ目の疑問は解消され、続けて二つ目の質問に入る。

その頃には、女の姿は十代の少女のものとなり、その少女の姿に、
シジは前以上の威圧感を感じた。

あの不敵な笑みを、まだ幼さの残る顔立ちでされたのなら、不気
味に思うのも仕方がない。

「N O・29との接点？　なんだ貴様。まさか、なにも知らされ
ていなかったのか……ひっ」

シジの質問に、若干の呆れと興味を含んだふうにそうこぼし、次
に女は衝撃の事実を告げる。

「くくくっ… あはははははは！　N O・29は、あたしが殺した
守人だ。接点があるのは当たり前だろうが！」

女の言葉に、場内は今まで以上にざわめく。

守人の位置付けは国の英雄、一応民達の憧れの的。

それを殺したのだから、客の反応はもつともだ。

今回無駄な混乱を避けようと、あえて犠牲者が守人だということ
を客に伏せていたことが、ここにきて仇になってしまった。

皆、殺された人物が何かしらの権力者だと、キル・フェイダノー
ルトにかけられた刑罰の重さから、薄々は気づいていたかもしれな
い。だが、まさかそれが守人だとは誰も思っまい。

女の発言に対処するにはもう遅い。今更ケース内を防音して、女

の発言権を奪つても無駄だ。むしろ客に更なる不安を与えることになる。

これは自分の思慮の浅さが招いた事態。シジは黙って唇を噛む。守人が殺された。守人が殺された。

客たちは前例のない事態に驚き、またはその特異さに喜び、ますます場は混沌としたに霧囲気に吞まれていく。

だがこの時、シジの関心はまったく別のところにあった。そして一人啞然とする。

シジが気がついたのは、先ほどのキル・フェイダノールトが言った内容の異質さについて。

“守人を殺した”だと。この女、確かにそう言い切ったのか……。目眩がした。

自分を支えている足元が崩れていくような感覚。

女のその発言は、あつてはならないある事実を示していた。

「貴様……狙って守人を殺したな」

「くく、もちろん」

予感的中した。

最悪な予感が。

例外はあるが、守人は自分が守人だということを隠して生活しているもの。

もちろん自らの家族にも。

よって、狙って殺すことなどまず不可能。

今回の事件で事実殺されたのは守人だが、それは狙って殺されたのではなく、この女が殺した人物がたまたま守人だったのだと、シジはそう思っていた。そう思うよう努めていた。

だが違った。

この女はそれを知っていた。教えられていないにも関わらずその

ことに気がついていてた。

つまり、はなからこの女は守人だからこそ殺したのだ。

「……貴様もあたしが殺してやろうか？」

ぞくりと背筋が凍る。

冗談じゃない。

一瞬向けられた純粹な悪意に氣押されたじろぐシジを、女は殺意のこもった目一別。

そしてあるうことが、椅子からすつと立ち上がってみせる。

「……馬鹿な！」

同時にバラバラバラ……と、キル・フェイダノールトの自由を奪っていたはずの縄が、無残にも彼女の足下へとぐるを巻きながら落ちていった。

一連の動作は、意図もたやすくよどみないもの。

それを突然目の当たりにしたシジは、縄抜けを見せられたというよりも、ある種の手品に遭遇した感覚に等しい。

シジはそのショックから、ここで次の行動に移るまでに僅かな口スを生んでしまう。

「はあああああああ！」

その隙を見るや否や、キル・フェイダノールトは自分を閉じ込めているケースを嬉々として殴り始める。

拳に力を込め、全体重をかけて一心不乱に殴る。殴る。殴る。殴る。

何かの武術の心得があるのか、普通びくともしないはずの頑丈なケースは、女の拳が奮われる度に鈍い悲鳴を上げ震えあがった。

「お、おい！ ガスの量を増やせ！ 限界一杯だ、早くしろおおお！」

目の前の光景にはつとしたシジは、無我夢中で叫ぶ。

柄にもなく焦っていた。

この女をここから出してはいけない。

そう本能が告げていた。

万が一刑を免れ生き延びたのなら、次にこの女に殺されるのは私だ。

この時、処刑を一旦中止するという考えは、シジの頭には浮かばなかった。

今ここで、確実に殺す。

なぜ守人を狙い殺すことができたのか。それをこの女に吐かせるまでは殺してはならないだろうに、内に生まれた大きすぎる恐怖は、理性や義務感などを軽く吹き飛ばしてしまう。

そんなシジの判断が功を奏したのか、女の拳は、ガスが強く吹き込まれた後は徐々に勢いを無くしていき、最後にはぴたりと止んだ。……殺ったか。

だが心には、どうにも拭いきれない恐ろしさが残る。

女から向けられた一瞬の殺意。たったそれだけのことで、シジの背中には、大粒の冷や汗が湧き出るかと思うほどの悪寒が貫いた。

幾度となく凶悪犯とは対峙してきたが、ここまで肝を冷やした経験は初めて。

あの女の正体は一体……。

ガスの濃度は相当高く、いつの間にかケース内は真緑色に染まっていた。

もう目を凝らせど、ケースの中にキル・フェイダノールトの姿を確認することはできない。なんの音も聞こえない。

奇妙な静寂。

余りの静けさに、女がそこにいるのかさえ疑ってしまう。
しばらく様子をうかがってみても一切反応のないケースに、客達の不安も募っていく。

「御静粛に！　どうか御静粛に！」

雲行きが悪さを察したシジは決心した。
客をなだめ、ケースの前に近づいていく。
だがその判断の遅さは致命的だった。
シジは我が目を疑うことになる。

「……なんだこれは。これは……ひびか？」

信じられないことに、ケースには幾つもの亀裂きれつが入っていたのだ。
そしてそれが、取り巻くようにして、ケース中のいたるところに
広がっている。

良く見ると、縦や横に深く入った亀裂の他に、円状の小さなひび
まである。

亀裂をたどってみると、全てが円状のひびの場所に辿り着き、またそこを出て他の円状のひびを結ぶようにして、ケース全体に均等に広がっていた。

一体何が起こっている。このケースに何が起きようとしている。
今もなお、不気味なほど静かにケースを広がり続ける亀裂。

「いかが致しますか」

気づけば、事態を重くみた裏方の一人が、次の指示を受けに舞台袖から駆けつけていた。

「……中を確認したい。一旦ガスを止め、ケース内の空気を入れ

換えさせるよう伝える。至急頼む」

「御意っ」

前例の無い現象。対処のしようもない。

最善は尽くしたが、それが最善という保証もない。

百歩譲って、円状の小さなひびは、あの女が殴ってできた痕だとしてしよう。

それでも信じられないことだが、それ以外には説明がつかない。

沈黙に沈んだ変化のないケース内。

それとは逆に、止められない亀裂の進行。

罪人の女はケースに何をするわけでもなく、確実にケースを壊し始めていた。

羊を狩る者9

決壊。

ピシリとケースの細かな破片が弾けた。

続けざまに、身が焼けるかと思うほどの熱風が体と衝突する。

それはすべて瞬く間もないこと。

シジが身につけていた服は、まるで高台に立てられた旗のようにバサバサと激しい音を立て靡いた。

身を庇おうと身構えることもできない間に、体は宙を舞う。

それが、キル・フエイダノールトを捕らえていた入れ物が弾け飛んだからだと気づいた時にはもう遅く、シジは爆風と共に数メートル先まで吹き飛ばされていた。

「う……くっ……はあ、あが」

ろくに受け身もとれず、地面へと叩きつけられるシジ。

強く頭を打ったせいか意識は朦朧もろうとしていたが、なんとか気力でもって立ち上がる。

「ひっ……ひっ、ひっ……」

息が苦しい。体が熱い。

漏れたガスを吸い込んでしまったせいで、しゃっくりが止まらない。

あの爆発。ケースの一番そばにいた自分が助かったのは、単に運が良かったただけだった。

その証拠に、シジの傍らには先の裏方の男の死体が転がっている。爆発が起きたのは、彼に命を与えた直後。

無残にも、割れたケースの鋭く大きな破片が、彼の後頭部にめり

込んでいる。

あの女……まさかこれで生きているのか？

確かに、ケースは破られた。

どんな手段を使ったのか検討もつかないが、キル・フェイダノールトを閉じ込めていたものは、この瞬間をもつて完全に無くなってしまったのだ。

女はそれを見事やってのけた。

だが、この爆発の威力……女はその中心にいたのだ。人間ならば、生きていられるはずがない。

砂埃と緑煙に包まれてた舞台の中で、シジは一刻も早くキル・フェイダノールトの生死を確認しようとケースの元へ急ぐ。

歩くと腹に耐えかねる激痛を覚えたが、そんなことを気にしている場合ではない。

頼む。生きていないでくれ……頼む。

とそこで、不意に足元でこつりと音がした。

シジは急ぐあまり、転がっているゴミに気づかず、誤って蹴ってしまっていたらしい。

目を落してみると、それは仮面。

ぼろぼろになり果てていることを除けば、自分のつけているものと同じ型の仮面……。

はっと気づく。

シジはその仮面を拾い、急いで身につけた。

なんとということか。それはシジの仮面だった。

先ほどの爆発のせいで無惨に破けぼろぼろな物となり、ついには顔から外れてしまっていたよう。

助かった。

シジの立っている舞台には、煙が充満している。

誰かに素顔を見られでもしたら、命が危なかったところだった。胸をなでおろして安堵するシジ。

だがそこで、煙の中から聞き覚えのある笑い声上がる。

「くくくくく……あーっはっはっはっは！」

ぞぞぞぞぞ、と。悪寒が痛みを伴ってシジの全身を駆け巡った。その声の主は、立ち込める煙の中、青ざめるシジの前に姿を見せる。

「貴様！……なぜ生きている」

この日何度目かの言葉を失う。

女は生きていた。

いたるところ血にまみれ、潰れ、体中に深い傷を負ってはいたが、あの不敵な笑みは今もなお健在。

煙の中ぎりりと光る鋭い瞳と、笑う口から覗く白い八重歯が、無言の中でもシジにこう語りかけてくる。

『狩るのは貴様らの方じゃない。あたしの方なんだよ』と。

キル・フェイダノールトは、こちらへ向かって歩いてくる。

たったそれだけの行為にシジは畏れを感じ、身動きすることすらままならない。

まさか、この女に顔を見られてはいないだろうか。そんなことが起きていたのなら……。

シジは完全にパニックに陥っていたため、論点の狂ったことを考え続ける。

この場合、顔を見られたなど大した問題ではない。

そんなこと、気にするは値しない。

なぜなら、キル・フェイダノールトはここでシジを殺すだろう。

女の殺気に溢れた目が、そう言っている。

だから、……だから、先のことなんて考えてどうする。

「くくくくく……」

シジは待った。

自らの死を受け入れ、キル・フェイダノールトを待った。

「Good - b y e A n e x e c u t i o n p e r s o n
(* 1) . 良 い 週 末 を 」

だが女は、すれ違いざまにそうつぶやき、何もせず舞台から立ち去っていく。

ぷつりと極限までに張りつめられていた緊張の糸が切れ、シジはその場に力なく倒れこんだ。

「助かった……のか」

キル・フェイダノールトは、今の自分の背丈には随分と大きすぎる服を引きずるようにして、皆の前から消えた。

それは嵐のように現れた女には、余りも静かすぎる最後。

「はやり、世の中は腐っている……な。……くそ、が」

所詮は人事。見ているだけの客にとっては、この惨状は最高のシヨーだったのだろう。

シジが痛み^{はくしゅ}に気を失う寸前、最後に耳にしたのは割れんばかりの拍手喝采^{はくしゅ}の渦。

そしてその時をもって、晴れて女は無罪放免となってしまうのだった。

羊を狩る者9（後書き）

* 1 . . . e x e c u t i o n p e r s o n

処刑人。という意味。

■「第二章」週末の1

ここ数日、シジは疲弊しきっていた。

ため息もこれで何度目か。

無理もない。

シジの行く先々、どこへいこうと視線。視線。視線の嵐。

これが自意識過剰、または被害妄想でないのだから、現状は深刻なものだろう。

あの日、あの処刑失敗を境に、視線の渦はシジを執拗につきまとうことになった。

それは守人として舞台に立っていない時でさえも。

「あれが罪人を殺し損ねた守人」「大失態」「大損害」「単なる事故ではすまされない」「よりにもよって守人殺しの大罪者を逃がすとは」「いい気味だ」「誰かあいつを処刑しろ」「責任をとれ」「殺せ」「殺せ」

仕方はないが、特に同業者らは、シジに一方的な言葉を吐く。おかげで、最近の待合室での居心地の悪さときたらひどいものだった。

まだしばらくは、夜道と背後に気をつける日が続くことだろう。さて。

だがシジは、守人となってからこういった経験が全くなかったわけでもなく、疲弊しながらも心内は毅然としていた。

この程度、怯えることはない。

むしろ目が覚めた気持ち。

うなだれながらも両肘を机に付き、その手を組んで外面は涼しく装ってみせる。

集まる視線など、こちらでも少し視線を向けてやればすぐに霧散し

ていった。

ここ数年は上手くいきすぎていたんだと、シジは思う。

守人というものに、人を殺すことにつくづく慣れきってしまった。
いた。

だからミスが生まれる。つけこまれる。

今回の件は、そういった怠慢な態度への罰だと受け止めよう。

しかし、事態をそれだけで終わらせることはできなかった。

そしてシジは、本当の意味でため息を吐く。

シジのため息は、はなからこの一点に向けられたもの。

呆れながらも、その集団に目を向ける。

彼ら守人連中は、まったくもって愚かで脳天気な生き物だ。

あれだけの事態をただの事故、シジの失態だけのせいだと本気で
思っている。

あの処刑最中に起こった事には不可解な点がいくつもあり、単に
罪人が奇跡的に助かったものとは思えない。

なによりキル・フェイダノールトは、被害者を守人と認識した上
で殺したという事実もある。

その動機、カラクリも、一切が不明のまま。

それら全てを暴くまで、我々守人に真の平穏が訪れることはあり
えない。

狙って守人を殺してみせた殺人鬼が、野放となった今となっては、
だ。

にも関わらず現時点でこれら異変に気づいている者は、シジを含
む大勢の守人の中でも、ほんの数人ほどこしかない。

「さて、どうしたものか」

シジのため息の中に憂いが混じる。

自分の身は、自分自身で守らねば。

シジはひとつの決心を固めた。

■「第二章」週末の1（後書き）

お待たせしました（汗）

2章を週一で連載予定。

<http://ameblo.jp/aoihappy/>

週末の2

決心を固めてから、また数日が過ぎた。

事故によつての傷も、肋骨の骨折を除けばほぼ癒えたといえるだろう。

だが身体の癒えに関係なく、シジは今日もまた同じ夢に捕らわれている。

それは俗に悪夢と呼ばれるもので、今日という日を迎えるまでに相当に疲れ果ててしまっていた。

目を閉じると闇が広がり、その闇の中で毎晩あの女に会う。

光のない世界で女の瞳だけは殺意を灯して輝き、夢が終わるまでの長い時間、ずっとこちらを眺め続けてくる。

その眼だけでも十分に分かった。

女が、シジを見て笑っているということが。

「——ちゃん。……お兄ちゃん！」

「……ああ、なんだリーシャか」

「大丈夫？ うなされてたみたいけど」

「そうか。私はまたうなされていたのか……」

「……うん。あのさ、よかったらこれ使って。少し濡らしてきたから」

「ああ」

だが今日のシジは、その夢の序盤に目を覚ますことができた。

目を覚ますと、まだ夜明け前。

薄暗い寝室には、ロウソクを灯しシジの顔を心配げに見下ろす妹の姿が。

どうやら妹は、シジの最近の様子を心配し気遣ってくれていたようだ。

濡れタオルの用意といい、準備もいい。

彼女の名前はリーシャ。義理の妹である。

歳はちょうど二十歳になったばかり。

シジとリーシャは十以上歳が離れている上、血の繋がりは無いが、本当の兄妹以上にお互いを想い合っている。

きつとシジにとってリーシャは、生きる希望そのものなのだろう。リーシャを引き取る前のシジは、いつも自分の死に場所を探すように過ごしているだけだった。

「リーシャ、ありがとう。少し悪い夢を見ていたんだ。だがもう心配はない……ほら、このとおり大丈夫」

シジは、そう言ってリーシャの頭を軽く撫でてやった。するとリーシャは、「もう子供じゃないんだから」とくすぐったそうに笑い、ようやく安心してくれたようだ。

「でもね、なにかあったらちゃんと私に相談してよね。お兄ちゃんの痛みは、私の痛みなんだから」

「ああ、約束する」

「絶対だよ」

いつものお決まりの約束をさせ、リーシャは部屋を出ていく。だがその約束は、毎回シジによって破られることとなるのだろう。

それを知りながらも、リーシャはシジと約束することを止めようとはしなかった。

きつと、彼女は心配なのかもしれない。

なぜならリーシャは、シジが守人だということを唯一知る人物。心配するのも当然か。

守人は、精神的にも肉体的にもつらい役職な上、恨みつらみにまみれた立場だ。

リーシャは、シジ一人にそれを背負わしたくないのだろう。

「雨か……」

シジは体を起こし、窓の外を見る。

窓の外に広がるのは、貧相な住宅街。

空を埋めつくしている分厚い雨雲のせいで、辺りは未だ薄暗く、一面灰色の世界だった。

本日は週末。

週十日の内の最後の三日が我が国の週末。

ということ、あの女の処刑失敗から今日で七日が経つことになるので、週明けから災難だったな、とまるで他人言のように考えてみた。

そうでもない、気がおかしくなりそうだったからだ。

「Good - bye An e x e c u t i o n p e r s o n .
良い週末を」

あの女は言った。

去り際に、妙に意味深な台詞を。

せつかくの休日に雨が降ると、どこか気がめいる。

特別、外出する予定があるわけではなかったが、シジの心は朝から沈んでいた。

「うつ……」

とそこで、少しの地響きと轟音ごうおんと共に、部屋中が一瞬の眩しい光に包まれる。

どこかに雷が落ちたらしい。その雷が引き金となり、雨は大降りなもののへと変わっていった。

雷はその後も、周囲を断片的に映し出してゆく。

窓から見る景色、民家や木木、そして人。目が慣れてきたおかげで、雷が鳴る度に、ある程度遠くのものも目に入るようになった。

「なに……人だと？」

だがそこでシジは疑問に思う。

なぜこんな土砂降りの早朝に、傘もささず出歩く人物がいるのか。窓に映るのは怪しげな不審人物。

心なしか、少しずつこちらにへと近づいてくるではないか。

その人物の存在に気付いてからは、雷はまだ一度も鳴っていない。そのせいで、不審人物の人影は見えているのにも関わらず、肝心の顔を確認することができなかった。

「くつ……」

とそこで、念願の雷によって、不審人物の顔が浮かび上がる。

「……………男か」

その人物は男だった。
あの女ではなかった。

その事実によつてシジは安堵し、窓にもたれかるようにして手を預けた。

考えすぎか。あの女と私が出会うはずがない。もし万が一顔を見られていたとしても、それは一瞬のこと。いかに小国とはいえ、その一瞬だけの記憶を頼りに尋ね人を探し出すことなど不可能なのだ。……そうに決まっている。

あの日を境に幾度も考えてきた持論をまた持ち出してはみたが、一度心に根付いてしまった不安はそうそうとれるものではない。

とそこで、シジの思考は一旦休止する。

もたれていたのがたつたのか窓が開いてしまい、風に吹かれた雨粒が容赦なく吹きこんできたからだ。

おかしいな。窓にはいつも鍵をかけているはずだが。

疑問を解決する前に、シジは窓を閉じる。

強い雨とはいえ一瞬。部屋もシジも致命的に濡れはしなかった。

だが窓を閉じたシジは、顔面蒼白となる。

窓が開いた理由を理解したからだ。

窓の鍵は壊されていた。どろどろになるまで無残に溶かされて。

「くつくつく」

途端、背後から押し殺すような小さな笑い声が漏れる。

シジはそれに反射的に振り返った。

「くつくく」

そこには、夢に見たものと同じ二つの眼光が。

それは余りにも静かにそこに存在し、シジを舐めるような視線で絡みとった。

「なぜ……だ」

再び雷が鳴った時、眼光の他にその人物の顔までもが鮮明に浮かび上がり、シジは恐怖によって膝をついた。

褐色の肌、そしてその肌を存分に露出させる派手な民族衣装。

纏うのは、闇に溶けてしまいそうなほどの長く漆黒な黒髪。

その人物は間違いなく、あの殺人鬼キル・フェイダノールトだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4115/>

酷刑の守人は歪に笑う

2011年1月15日01時28分発行